

## エクспанデッド・シネマ再考

Japanese Expanded Cinema Revisited

2017年8月15日（火）～10月15日（日）



シュウゾウ・アヅチ・ガリバー 《シネマティック・イルミネーション》

1968-69年 インターメディア スライドフィルム 1440枚、スライドプロジェクター18台、モノクロ、カラー、サウンド（本展のみ） 音楽監修：立川直樹 東京都写真美術館蔵

### 展覧会概要

当館の映像コレクションを軸に、映像メディアの歴史を振り返りながら、未来の映像の可能性を探る「エクспанデッド・シネマ再考」展を開催します。

「エクспанデッド・シネマ（拡張映画）」は、従来の映画館等でのスクリーンへの投影とは異なった方法で上映される映画です。それは、今日では既に定着しているマルチプロジェクションやループ上映、ライブ・パフォーマンスの先駆けとなるもので、同時代のインターメディアやアート&テクノロジーの状況と呼応しながら、映像がもつ多様な可能性を再発見していく試みでした。この上映形式は、1960年代半ば頃から欧米を中心に、美術家や実験映像作家によって展開されていきます。本展では、「エクспанデッド・シネマ」の誕生から様々な実験を繰り広げた日本の作品に着目し、その独自性と先見性を検証していきます。

## 出品作家／作品

### 作品 13 点

#### 出品作家

松本俊夫、シュウゾウ・アツチ・ガリバー、飯村隆彦、おおえまさのり、真鍋博、城之内元晴、佐々木美智子、金坂健二、ジャド・ヤルカット

そのほか、日本のエクспанデッド・シネマの歴史的な関連資料 110 点を紹介します。

### 松本俊夫

#### 《つぶれかかった右目のために》

1968年 シングルチャンネル・ビデオ (オリジナル 16 ミリフィルム 3本をデジタル変換) モノクロ、パート・カラー、サウンド、13分 音楽：秋山邦晴

日本におけるエクспанデッド・シネマの代表作。ヒッピー、学生運動、金嬉老事件など、当時のさまざまな風俗や出来事が3台のプロジェクターから投影され、ドキュメンタリーとアヴァンギャルドを横断するマルチ・プロジェクション作品。



#### 《スペース・プロジェクション・アコ》(記録版)

1970年 シングルチャンネル・ビデオ (16 ミリフィルムをデジタル変換) カラー、サウンド、15分 音楽：湯浅譲二

大阪万博せんい館で発表されたマルチプロジェクション作品。直径 15m、20m のドーム内で、主役のアコの映像を巨大な彫刻に投影。35 ミリプロジェクター10 台、スライドプロジェクター8 台、スピーカー57 台を配置し、湯浅譲二と協働で観客参加型の映像音響体験をつくりだした。



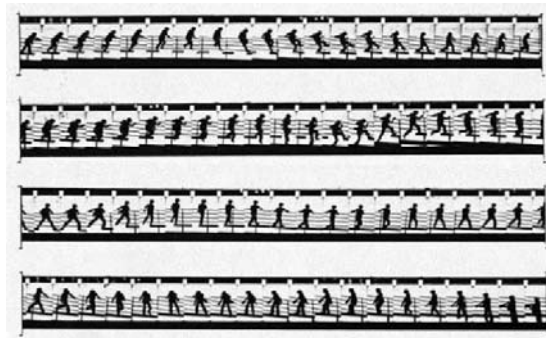
松本俊夫/1932年愛知県名古屋生まれ、2017年死去。映画監督・映像作家・映画理論家。東京大学文学部美学美術史学科を卒業後、新理研映画に入社し、〈実験工房〉のメンバーを起用してPR映画《銀輪》(1956)を演出。その後、『記録映画』『映画批評』などの雑誌で理論家として活動しつつ、《安保条約》(1959)、《西陣》(1961)、《石の詩》(1963)などの記録映画を手がける。1968年に松本プロダクションを設立、ATG(日本アート・シアター・ギルド)と提携した《薔薇の葬列》(1969)で劇映画に進出。その後《修羅》(1971)、《十六歳の戦争》(1973-76)、《ドグラ・マグラ》(1988)などの劇映画と並行して、《つぶれかかった右眼のために》(1968)、《エクспанション=拡張》(1972)、《アートマン》(1975)など数々の作品を製作し、国内における実験映画やビデオ・アートの動向を牽引した。イベント「クロストーク/インターメディア」(国立代々木競技場第二体育館、1969)では、《アイコンのためのプロジェクション》で直径4メートルのバルーン20個に映像や照明を投影、また大阪万博「せんい館」では《スペース・プロジェクション・アコ》(1970)でマルチ画面の映像制作を行なった。主著に『映像の発見—アヴァンギャルドとドキュメンタリー』(1963)、『映画の変革—芸術的ラジカリズムとは何か』(1972)、『映像の探求—制度・越境・記号生成』(1991)[以上、すべて三一書房]などがある。

## シュウゾウ・アツチ・ガリバー

### 《シネマティック・イリュミネーション》

1968-69年 インターメディア スライドフィルム 1440枚、スライドプロジェクター18台 モノクロ、カラー、サウンド（本展のみ） 音楽監修：立川直樹

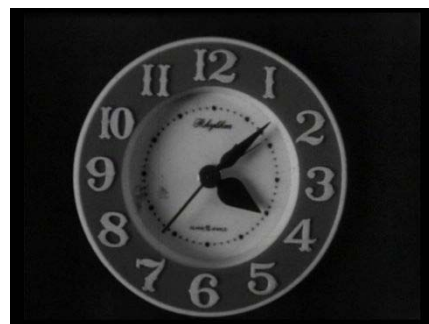
1969年の「インターメディア・アート・フェスティバル」において、銀座のディスコ「キラール・ジョーズ」を会場に上映された伝説的作品。16ミリフィルムで撮影した映像をスライド写真に加工し、18台のプロジェクターによって360度のスクリーンへ投影。本展で約50年ぶりに再現する。



### 《Watch》

1966-67年 シングルチャンネル・ビデオ（16ミリフィルムをデジタル変換）モノクロ、サイレント

関西の前衛芸術グループ〈The Play〉に参加するなど、パフォーマンスを中心に表現活動をしてきた作家の、初期の実験的な映画作品。必ず4時7分から上映されなければならない。投影された時計の映像は約20分間、実時間と同じ時を刻み続ける。



シュウゾウ・アツチ・ガリバー/1947年滋賀県大津市生まれ、東京在住。彫刻、版画、写真、パフォーマンス、インスタレーションなどの幅広いジャンルを横断する現代美術作家。高校時代にマルセル・デュシャンの著作に衝撃を受け、1965年ハプニング《草地》を発表。1967年には池上慶一、水上旬らによるハプニング集団〈プレイ〉に参加。上京後は、映画という媒体そのものに注目する《Switch》(1967)、《Flying Focus》(1969)ほか、実験的な映像作品を制作し、1969年「インターメディア・アート・フェスティバル」にて《Cinematic Illumination》を発表する。1973年に写真集『Second Life of Gulliver』を刊行。1990年代以降、オランダ、イタリア、ドイツなどで作品を発表している。2010年には滋賀県立近代美術館で回顧展「EX-SIGN」が開催された。

## 飯村隆彦

### 《リリパット王国舞踏会》

1964/1966年 ダブル・プロジェクション 16ミリフィルム、モノクロ、サウンド、12分 作家蔵

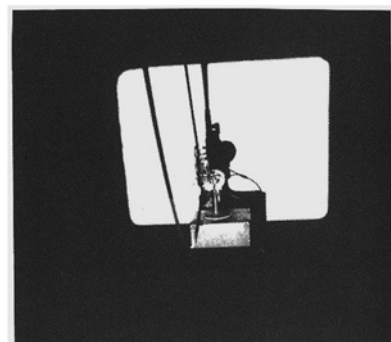
〈ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ〉に参加し、その後も身体を酷使するパフォーマンスで知られた風倉匠の日常的動作を、いくつかの断片によって構成。露出過多のプリントに針やナイフでスクラッチなどを施した別のバージョンを加えた、本展上映が日本初となるダブル・プロジェクション作品。



### 《デッド・ムービー》

1964年 フィルム・インスタレーション 16ミリフィルム、モノクロ、サイレント 作家蔵

映画の死を象徴的に示した、投影するイメージが存在しないフィルム・インスタレーション。クロミをループ的に投影する何も映さない状態の旧型映写機に、もう1台の映写機で光を投影し、その影だけを映し出す。



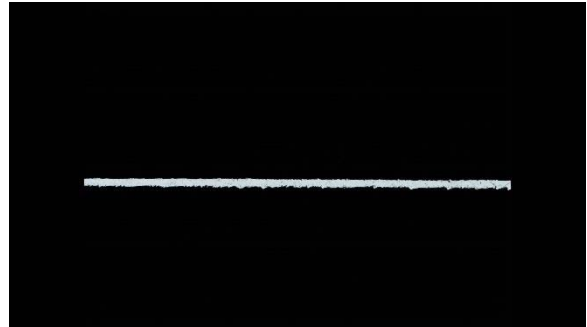
飯村隆彦/1937年、東京都生まれ。1959年慶應義塾大学法学部卒業後、実験映画の制作を始める。1960年代にオノ・ヨーコ、赤瀬川原平、小杉武久、土方巽ら前衛芸術家の協力のもと、8ミリや16ミリの前衛映画を個人で制作する。1964年に実験映画集団〈フィルム・アンデパンダン〉を結成し、日本の個人映画史上最初の実験映画祭を行なう。1965年、実験映画《LOVE》がニューヨークの実験映画のリーダー、ジョナス・メカスによって高く評価される。1969年にビデオ・アートの制作を始め、1974年にニューヨーク近代美術館、1979年にはホイットニー美術館で個展とパフォーマンスを行ない、個人映画作家として国際的に評価される。代表作に《OBSEVER / OBSERVED》(1975)、《あいうえおん六面相》(1993)、《SEEING / HEARING / SPEAKING》(2001)。著書に『芸術と非芸術の間』(三一書房、1970)、『映像実験のために』(青土社、1986)など多数。

## おおえまさのり

### 《ループ式 No.1 / No.2 / No.3》

1966年 フィルム・インスタレーション 16ミリフィルム、モノクロ、サウンド、ループ 作家蔵

黒い背景に一本の白い線のイメージが延々とタイミングを変えて投影される、映像体験に特化した作品。サイケデリック文化のなかで生み出された異なった間隔の作品(No.1、4.2秒、No.2、2.8秒、No.3、4.7秒)を、本展では各5分間のループにて上映する。



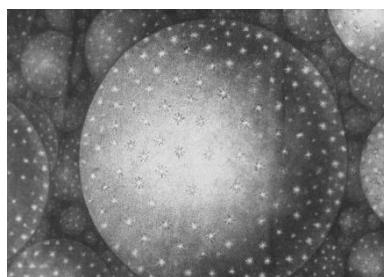
おおえまさのり/1942年徳島県鳴門市生まれ、山梨県在住。映像作家、作家。1965年にニューヨークに渡り、ジョナス・メカスらアンダーグラウンド映画作家たちの影響下で映画制作を始める。ティモシー・リアリーやリチャード・アルバートとの交流を通して、アメリカで当時起こっていた「サイケデリック・レヴォリューション」を体験。一連の社会的なドキュメンタリー作品と並行して、《ループ式》(1966)などサイケデリックによってもたらされた個人の内的ヴィジョンの映像化と呼ぶべき作品を多数制作。《Head Game》(1967)、《No Game》(1967)は、のちに〈ニューズリール〉により全米配給が行なわれた。CBSの依頼により制作された6面マルチプロジェクション作品《GREATEST SOCIETY》(1967)は、当時のアメリカのニュース映像をコラージュし、社会的メッセージと内的イメージを一体化した、エンヴァロメンタルな作品となった。1969年に帰国、自らの作品を上映するかたわら、金坂健二、中平卓馬とともに〈ニューズリール・ジャパン〉を立ち上げる。その活動は映画のみにとどまらず、70年以降は写真集や精神世界に関するエッセイなどの多数の著作、『チベットの死者の書』(講談社、1974)をはじめ翻訳多数。

## 真鍋博

### 《マリーン・スノウ》

1960年 シングルチャンネル・ビデオ (16ミリフィルムをデジタル変換)  
モノクロ、サウンド、22分 愛媛県美術館蔵

実写で石油を扱った同題の科学映画に触発されて制作したアニメーション映画。「舞台のためのアニメーション」という副題がつくられ、放送詩の朗読に加え、投影された映像と絡むように観世栄夫のアクションが加えられる、日本におけるエクспанデッド・シネマの先駆的作品。





真鍋博/1932年愛媛県宇摩郡（現・新居浜市）生まれ、2000年死去。イラストレーター、アニメーション作家、エッセイスト。多摩美術大学（油画専攻）在学中より読売アンデパンダン展などで作品を発表、池田満寿夫らとグループ（実存者）を結成するとともに、イラストレーターとして新聞、雑誌、SF小説などの挿絵を手がける。第1回の草月コンテンポラリーシリーズ「作曲家集団／3月の会 林光」では《ミュージカル・プロジェクション〈僕は神様〉》（1960）の制作に携わり、第5回の草月ミュージック・イン「モダン・ジャズの多角的応用」においては、「映像とジャズの結合」として《シネ・カリカチュア》（1960）を発表するなど、映像と他の表現分野との横断的な実験をいち早く開始する。そして、久里洋二、柳原良平と〈アニメーション3人の会〉を結成、第5回の草月コンテンポラリーシリーズ「3人のアニメーション」において、アニメーション上映と舞台での能や照明を融合させた《マリーン・スノウ》（1960）を送り出し、以降、《シネ・ポエム 作品 No.1》（1961）、《時間》《March》（1963）、《潜水艦カシオペア》（1964）などを手がけていく。

## 城之内元晴

### 《ドキュメント6・15》

1961年シングルチャンネル・ビデオ（16ミリフィルムをデジタル変換）  
モノクロ、サイレント、18分

安保闘争における記録映画の枠組みを超えた領域横断的な作品から、本展では現存する唯一のフッテージを上映。1960年6月15日の安保闘争で亡くなった樺美智子の追悼統一集会（翌61年の同日に開催）で、16ミリフィルムやスライド・プロジェクターの投影、音響などを用いてハプニングを目的に上映され、賛否を巻き起こした。



### 《新宿ステーション》

1974年 シングルチャンネル・ビデオ（16ミリフィルムをデジタル変換）  
モノクロ、サウンド、16分

1968年10・21国際反戦デーにおける新宿の闘争を記録した「ゲバルトピア」シリーズの一篇。城之内自身がスクリーンの前に立ち、自作の詩を詠み重ねるパフォーマンス上映を続けていたが、74年に詩の朗読を収めた映像によって再構成された。



城之内元晴/1935年茨城県生まれ、1986年死去。映画監督。1957年、日本大学芸術学部映画研究会（日大映研）に参加し、《Nの記録》（1959）、《プーピー》（1960）の演出を手掛ける。1961年にジャンルを越えた表現者たちの交流拠点として、〈VAN映画科学研究所〉を立ち上げる。そこで荒川修作、風倉匠、赤瀬川原平、刀根康尚、小杉武久などの前衛作家たちと《ドキュメント6・15》（1961）、《シェルタープラン》（1964）、《WOLS》（1964-69）、《ゲバルトピア予告編》（1969）、《新宿ステーション》（1974）などの共同制作を行う。1970年以降は神奈川映画ニュース映画協会および東京都映画協会にて数多くのニュース映画を手がけた。1977年に製作を開始した《アイヌモシリへの道》は、未完の記念碑的な作品である。

## 佐々木美智子

### 《何時か死ぬのね》

1974年 シングルチャンネル・ビデオ（16ミリフィルムをデジタル変換）  
モノクロ、サウンド、30分 作家蔵

日大全共闘を撮った自らの写真と日常の断片的映像が組み合わされた、1968年から74年までのドキュメントかつ、作家個人の日記映画。



佐々木美智子/ 1934年北海道根室市生まれ、東京在住。22歳で上京、新宿でおでんの屋台を引いたあと、日活撮影所の編集部に3年間勤務。東京総合写真専門学校で写真を学び、日大全共闘、映画のスチール写真などを撮るとともに、運動の写真と映像を組み合わせた《何時か死ぬのね》(1974)を完成させる。その傍らで、新宿ゴールデン街で「Bar むささび」、新宿歌舞伎町で「ゴールデンゲート」などを経営。1979年にブラジルへ渡り、アマゾンで9年間飲食店・ペンションなどを経営する。1988年、サンパウロへ移り、私設図書館を創立。1993年に帰国。著書に『新宿発アマゾン行き』(文芸春秋、1994)、写真集に『日大全共闘』(鹿砦社、2009)。

## 金坂健二

### 《ホップ・スコッチ (石けり)》

1967年 シングルチャンネル・ビデオ (16ミリフィルムをデジタル変換)  
白黒、サウンド、10分 ハーヴァード・フィルム・アーカイヴ蔵

チャールズ・W・スミス原作の戯曲を金坂が映画化。石けりに興じる警官が殺される物語(アメリカで撮影)と、警官をだますハプニング(日本で撮影)が組み合わせられ、警官が権威の象徴として描かれている。1967年1年、エクスパンデッド・シネマの事例として、本作の上映中に、仲間たちを招いて即興で音楽をつける「映画石けりの音入れハプニング」が草月アートセンターで開催された。



金坂健二/ 1934年東京都生まれ、1999年死去。写真家、映像作家、映画評論家。慶応大学文学部英文学科卒業後、松竹に社長づき通訳として入社。映画評論家として活躍する一方で前衛映画の製作を行い、60年代から70年代にかけて渡米し、アンディ・ウォーホルやアレン・ギンズバーグなど当時のカルチャー・シーンの中心人物とも交流を持ちながら、アンダーグラウンド映画を初めて日本に紹介。ストリートの深部に入り込み自らも写真家として多くの作品を発表した。

## ジャド・ヤルカット

### 《EXPO '67》(〈METAMEDIA〉より抜粋)

1967年 シングルチャンネル・ビデオ (16ミリフィルムをデジタル変換) カラー、サウンド、4分 アンソロジー・フィルム・アーカイヴス蔵 協力 ジャド・ヤルカット財団

実験映像作家ヤルカットが1966年から1971年に制作したインターメディアとアヴァンギャルドについての映画ジャーナル「メタメディア」からモントリオール万博の記録を日本初公開する。



ジャド・ヤルカット/ 1938年ニューヨーク生まれ。2013年死去。実験映像作家、ビデオアーティスト、インターメディアアートの先駆者として知られる。60年代、70年代にナム・ジュン・パイクをはじめ、数多くのアーティストとコラボレーションを行い、実験映像、ビデオ作品を制作。1973年にオハイオ州デイトンへ移住し、ライト市立大学でビデオ・アートの授業を開始し以降さまざまな大学で教鞭をとる。



# 日本のエクспанデッド・シネマ

エクспанデッド・シネマは、その形式や内容からも、いま国際的に大変関心が高まっている映像表現です。とりわけエクспанデッド・シネマが登場する1960年代の日本は、政治や社会が大きく変化していく時代でした。そのような中で、映像はドメスティックな場から社会的な大型イベントまで、さまざまな場所で、さまざまな手法で表現が試みられました。

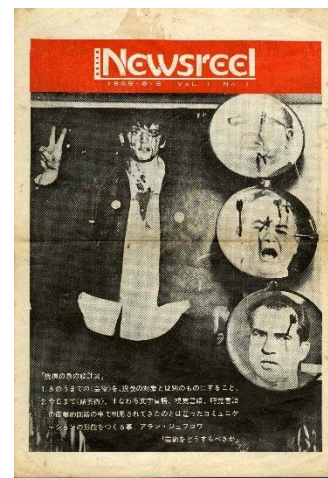
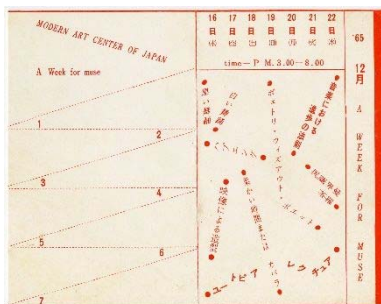
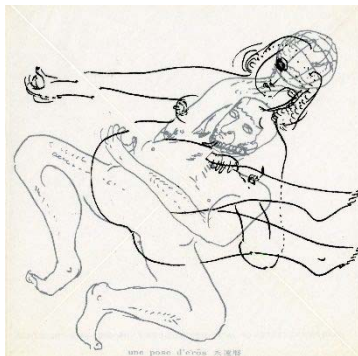
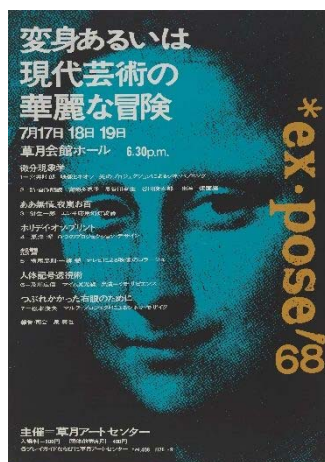
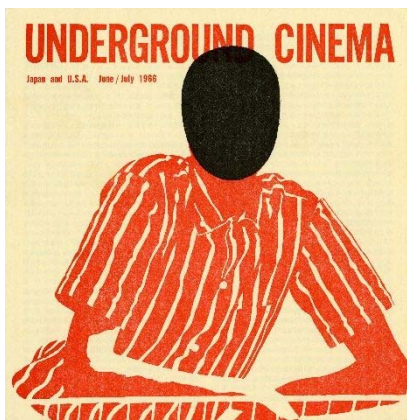
本展では、日本作品の独自性と先見性に着目し、60年代の実験を現代の技術によって忠実に再現することにより、歴史的瞬間をよみがえらせる画期的な試みです。当時の資料や記録からも、時代を再検証していきます。また時代の変化のなかで、個人の日常やさまざまな境界を拡張していく実験にも注目していきます。

日大映研…1957年に設立された日本大学芸術学部映画研究会の略称。赤瀬川原平、飯村隆彦、オノ・ヨーコなど、戦後の多くの前衛芸術家たちが交流した。

草月アートセンター…草月会館において、1958年9月に映画監督の勅使河原宏によって設立された組織で、60年代における日本の前衛的な映像表現を紹介する中心的な場となった。

日本万国博覧会…60年代の前衛映像作家の活躍は、1970年に大阪で開催された日本万国博覧会へとつながり、多くの革新的な日本の映像表現が世界に紹介された。

さらに、海外作家の事例やエクспанデッド・シネマが多く登場したことで知られているモントリオール万博（1967）などの関連資料とあわせ、歴史的にエクспанデッド・シネマを再考します。



左上／「アンダーグラウンド・シネマ」冊子（デザイン：細谷巖） 1969年 一般財団法人草月会蔵（慶應義塾大学アート・センター寄託） 中央上／「EXPOSE 1968 変身、あるいは現代芸術の華麗な冒険」ポスター 1968年 一般財団法人草月会蔵（慶應義塾大学アート・センター寄託） 右上／《ゲバルトピア予告編》撮影風景 1969年（写真：佐々木美智子）個人蔵 左下／MAC・J機関誌 1965年2号 絵・足立生 個人蔵 中央下／「ミューズ週間」案内状 1965年 ポスター 個人蔵 右下／『ニューズリール・ジャパン』1969年1巻1号 個人蔵

## 展覧会図録

『エクспанデッド・シネマ再考』

編集・発行 東京都写真美術館 編集協力 grambooks 2,052 円 (税込)

テキスト執筆 平沢剛 (明治学院大学研究員、映画研究者)、ジュリアン・ロス (ロッテルダム国際映画祭プログラマー、映画研究者)、田坂博子 (東京都写真美術館学芸員)

## 関連イベント

### 出品作家によるアーティストトーク

日 時 / アーティスト

8月19日 (土) 14:00-15:30 飯村隆彦

8月20日 (日) 14:00-15:30 おおえまさのり

8月26日 (土) 14:00-15:30 シュウゾウ・アツチ・ガリバー

定 員 各回50名 会 場 東京都写真美術館2階ロビー

当日10時より1階総合受付にて整理券を配布します。

### 8ミリ自家現像ワークショップ

8ミリフィルム (モノクロ) での撮影から現像、上映までを全2日間で行う制作ワークショップです。

日 時 9月23日 (土・祝)、24日 (日) 各日 10:15-19:00

定 員 12名 (事前申込制、応募者多数の場合は抽選)

会 場 1階スタジオ 参加費 5,000円

講 師 石川亮 (東京国立近代美術館フィルムセンター技術員、映像作家)、  
郷田真理子 (フィルム技術者、株式会社 IMAGICA ウエスト)

### 担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・4金曜日 16:00より、担当学芸員による展示解説をおこないます。展覧会チケット (当日印) をご持参の上、B1F展示室入口にお集まりください。

第10回恵比寿映像祭プレイベント

### 第10回恵比寿映像祭 国際シンポジウム

#### インヴィジブル、インターメディア、エクспанデッドー映像の可能性 (仮称)

来年2月の第10回恵比寿映像祭の開催を記念するプレイベントとして、恵比寿映像祭を読み解くための、国際シンポジウムを開催します。

日 時 2017年10月9日 (月・祝) 14:00~17:00 (開場 13:45) ※英日同時通訳付

主 催 東京都 / 東京都写真美術館・アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団) /  
日本経済新聞社

会 場 東京都写真美術館 1階ホール 入場料 無料 / 要入場整理券

定 員 190名 (整理番号順入場 / 自由席)

出 演 ブランデン・W. ジョセフ (コロンビア大学教授、美術研究者)、平沢剛 (明治学院大学研究員、映画研究者)、ジュリアン・ロス (ロッテルダム国際映画祭プログラマー、映画研究者)

※当日10時より1階ホール受付で入場整理券を配布します。



## 開催概要

主催 東京都 東京都写真美術館

協賛 凸版印刷株式会社

会場 東京都写真美術館地下1階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>

開館時間 10:00～18:00 (木・金は 20:00 まで) ただし、8月25日(金)までの木・金は 21:00 まで開館

※入館は閉館 30 分前まで

休館日 毎週月曜日 (月曜日が祝日の場合は開館、翌平日が休館)

観覧料 一般600 (480) 円、学生500 (400) 円、中高生・65歳以上400 (320) 円

※ ( ) は20名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料 ※ただし、8月18日(金)、25日(金)の18:00-21:00はサマーナイトミュージアム割引 (一般 480円/学生・中高生 無料/65歳以上 320円 ※各種割引の併用はできません)

## このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版(参考図版を除く)をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。  
図版のトリミングはできません。

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館

1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>

展覧会担当 田坂博子 [h.tasaka@topmuseum.jp](mailto:h.tasaka@topmuseum.jp)

遠藤みゆき [m.endo@topmuseum.jp](mailto:m.endo@topmuseum.jp)

広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 [press-info@topmuseum.jp](mailto:press-info@topmuseum.jp)